



Title	「旅の途中で」
Author(s)	高山, 善行
Citation	語文. 2022, 118, p. 4-7
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/95227">https://hdl.handle.net/11094/95227</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「旅の途中で」

高 山 善 行

宮地裕先生の訃報に接して一年あまりが過ぎたが、いまだに現実感がもてないでいる。姿勢正しく颯爽とした映像しか思い浮かばず、私の記憶のなかでは全く変わりがないからである。先生との思い出は数多くあるが、ここでは印象に残る出来事を挙げていき、先生のお人柄を偲びたいと思う。

私は、先生が阪大を定年退官されると同時に修士課程を修了した。留学生のオタ・ジュンコさんと私は、阪大大学院での最後の修論指導学生ということになる。修士課程の二年間、私の指導教官は宮地先生と前田先生のおふたりであったが、研究分野が文法だったので、修論指導は宮地先生にお願いすることになった。

先生との出会いは、一九八五年二月、大学院入試の面接の場であった。春に国語学会（現日本語学会）が阪大で開催され、秋は阪神タイガースが日本一になり、大阪の街が湧いた年のことである。私は愛媛大学出身で阪大生え抜きではない。それ以前にお会いすることは一度もなかった。

こんなこともあった。教官研究室での個人指導のとき、ホワイトボードに大きな正方形をお書きになつたので、何が始まるかと思つて見ていると、正方形を点線で四等分し、「テンはここ、マルはここ」と青字で句読点の位置を示された。まだワープロが普及しておらず、原稿用紙手書きの時代であった。

面接では、年長の教授らしくどつしりと座つておられた。やや重々しい口調で、「筆記試験の成績は、低空飛行やな」「卒論も強靭なものではないが、…」とおっしゃったのを覚えている。ちょうど国語学会開催を目前にした時期であり、「会場の椅子運びで人が要るから採つてもらえた」とは口の悪い先輩の言である。

大学院に入ると、研究計画書を教務課に提出することになつていた。自分なりの研究の構想を見ていたが、なかなかお認めいただけなかつた。締切があるので、事務には書類を提出したが、「推定表現の研究」というテーマが決まり、研究をスタートしたのは、夏休みに入る直前であった。

こんなこともあつた。教官研究室での個人指導のとき、ホワイトボードに大きな正方形をお書きになつたので、何が始まるかと思つて見ていると、正方形を点線で四等分し、「テンはここ、マルはここ」と青字で句読点の位置を示された。まだワープロが普及しておらず、原稿用紙手書きの時代であった。

研究については、「視野を広くもつこと」「出発点が大事であること」を強調されていたと思う。後者については、ロケットに喻えられ、「発射の角度を誤ると、目標から少しづつそれしていくからね」とおっしゃっていた。

大学院に入った当初、先生は普通に話ができる人ではなかつた。おじいさんと孫ほどの年齢差に加え、都会人である先生に対して私は田舎者である。先生は水泳、スキーなどをなさるスポーツマンだが、私はカナヅチでスキーなどやつたことがない。共通の話題がないから話が続かない。墜落した日航機に搭乗の予定だつたと誰から聞き、「危なかつたですね」というと、「戦時中は飛行機が落ちるのは日常茶飯事でした」で話が終わつた。それ以降、コンパではできるだけ離れて座るようにした。

修士課程一年目の大学院の演習は「複合言語形式の研究」というテーマで受講生が十名ほどいた。そのうち国語学の大学院生は、大谷伊都子さん、藤田保幸さん（いずれも当時D3）、李漢燮（イ・ハンソップ）さん（D2）、オタ・ジュンコさん、私の五名であつた。当時、国語学の院生は少なく、それで全員である。（M2、D1はいなかつた）受講生の多くは留学生で、発表内容は、中国語、韓国語、タイ語などと日本語との対照研究であった。先生はひとりひとりの発表に対して慎重に言葉を選んでコメントさせていた。

修士二年目、秋が深まつた頃。午前の演習の授業の後、先生とふたりでお昼ご飯を行つたことがある。学生食堂は混んでるので、正門前のファミレスへご案内した。先生はいつも背筋

が伸びて姿勢が良く、歩くスピードが速い。私は置いていかれないようついていくので必死だった。黙々と歩いていたが、正門の手前あたりで、「学界を頼むで」と言われた。店ではメニュー選びに手間取つたが、「和食を」ということでカニ雑炊を注文した。

研究室のコンパでは、一次会がお開きになる前にさつと姿を消される。われわれが店から出るときには、もういらつしやらない。二次会、三次会と、遅くまで学生につき合つてくださるのは、いつも前田先生だつた。

しかし、学生と話をするのがお嫌いであつたわけではない。春の日の夕刻、文学部の玄関前に国文研究室の学生たちが集まり、缶ビールを飲みながら花見をしていた。先生が玄関から出てこられたので、いつものように、「じゃあ」と手を挙げ、帰宅されるかと思っていたら、まつすぐ我々の方に進んで来られて、桜の木の下に腰を下ろされたのである。そのあとしばらく学生たちとの談笑に興じておられた。

ご退職の年の正月、先生のお誕生日を兼ねた新年宴会を服部駅（いまの服部天神駅）近くの割烹「檜（ひのき）」で開いた。修論、卒論の締切直前にもかかわらず、研究室の院生、学部生のほとんどが参加した。その夜は、泥酔する者、号泣する者などあり異様な雰囲気だつた。飲み会は場所を変えて朝まで続いた。

修論審査が終わり博士課程への進学が決まつた頃。修論で現代語と古典語を扱つたが、両方やるのは辛く、どちらかに絞ろうと心に決めた。研究室にうかがい、「現代語と古典語のどちらをやれ

ばよいでしょうか」とお聞きすると、即座に、「両方やつたら…、大変だけど」。後に、現代語と古典語の橋渡しとなる教科書を編み、「本当に大変でしたよ」と申し上げると、「ようやるわ」とだけおっしゃった。

先生は阪大を退官された後もずっと私のことを気にかけてくださっていた。どこで情報収集されるのかわからないが、私の状況を把握しておられた。逆境にあつたときは、お葉書で助言、励ましの言葉をくださった。

ゆつくりお話をうかがうことができたのは、いつもお酒の席であった。先生はお酒が好きで、「あちこち自分で行つてみるけど、良い店はまあ、二十軒に一軒だね」ということである。先述の「檜」はその一軒であるが、ご逝去とほぼ同時に店を閉じたのは、できすぎた偶然である。

これも阪大ご退官後の話だが、一度だけバーに連れて行つていただいたことがある。阪大国語学の草創期のことを知りたいと思いい、池上禎造先生のお名前を出すと、京大での研究会のエビソードを語つてくださった。新聞の四コマ漫画の吹き出しのセリフを空白にして、各自で埋めていたそうである。大喜利のようで、時代が感じられて面白かつたが、肝心の話は聞けずじまいだった。

先生は、何事に対しても好奇心旺盛で、それはずつと変わらなかった。あるとき、「パソコンで曲を作るにはどうしたらええんや」とおっしゃるので、「鼻歌を楽譜にできる作曲用ソフトがあるらしいですよ」と梅田の電器店をお教えた。当時は七十年代だつ

たはずで、その年代でパソコンをお使いになるのに驚いた。また、携帯電話の「iモード」が流行り始めたとき、「どういう仕組みになつとるんや」と尋ねられた。説明に困り、「あちこちのアンテナから電波が伝わるんです」と申し上げると、あきれた表情で「おうような」とおっしゃった。

先生は、大学をお辞めになつたあとは清荒神のマンションでひとり暮らしをなさつていた。私も宝塚に住んでいた時期があつた。夏の日の午後、缶ビールをもつてご自宅をお訪ねしたことがある。冷蔵庫から出してこられた瓶詰めのウニと醤油煎餅をつまみに、ふたりでビールを飲んだ。

話の途中で、「いいものを見せてやろう」と奥の部屋から持つてこられた木箱にはメダルの束が入つていて。スイミングスクールの水泳大会で獲得されたとのこと。メダルは金、銀、銅がそろつており、「どうや、すごいやろ」と得意顔だった。

老人施設に移られてからは、直接お会いすることはなくなつたが、人の話や書物を通して何度か会えうことがあつた。谷崎源氏のお仕事、「南モデル」とのかかわり、安倍能成との交流など、噂で聞いてはいたが、具体的なことは後から知つた。安倍能成は私と同郷で、父が勤めた高校の卒業生でもある。

最近、『王朝—遠藤嘉基博士古稀記念論叢』に掲載された先生の文章を四十年ぶりに読み直してみた。大学入試の成績について述べおられるなかで、「最低点の低空飛行はまずかった」という一文を見つけた。大学院の面接で、私の成績を「低空飛行」と評さ

れたが、それは先生ご自身のことでもあつたのである。共通点を見いだせて、妙にうれしい気分がした。

私が先生について知り得たのは、ほんのわずかである。残された時間のなかで、いま少し知りたいと思う。先生は御自身のことについては多くを語られず、思いは文章や詩に託された。それらを読むと、先生の心の中が見えてくる。人生は旅に喩えられるが、これからも行く道の先々で出会えることだろう。

十年以上前のことである。私は蛍池駅でモノレールを待つていた。松山の実家に帰省するため、伊丹空港に向かう途中であつた。反対ホームに入ってきた電車をぼんやり眺めていると、人の流れのなかに、足早に乗り込む先生の姿があつた。カジュアルな服装だったから、映画にでも行かれるところだつたのだろうか。そのときは、またお会いする機会があると思っていた。しかし、それはついにかなわなかつた。

(たかやま・よしゆき 福井大学教授)